

経営理念	<p>【教育目標】「自ら学び、共に生きる、未来を創る」</p> <p>① 主体的な学習と自己調整学習する力の育成 ② 他者との協働、支え合い、思いやりと多様性の尊重、郷土愛や地域貢献できる創造性の育成 ③ 先行き不透明な時代に軸として持つべき「未来をデザインする力」(進路実現)</p> <p>【研究主題】 主体的に考え、判断し、行動できる力の育成～生徒指導の4つの視点を生かして～</p> <p><めざす生徒像> ・自分の存在を大切にできる生徒 ・支え合い認め合う生徒 ・気力に満ちた生徒 <めざす学校> ・生徒がいそいそと活動している学校 ・生きる力を育成する学校 ・地域に貢献できる学校 <めざす教職員像> ・教育に対する熱意と使命感を持つ教職員 ・子どもを信頼し、可能性を伸ばすことができる教職員 ・責任感や協調性を持ち、互いに高め合う教職員</p>
------	---

中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価(R7)		改善策等		
		達成状況	評価	考察	評価			
知	①各学力調査において全国平均に引き上げる。 ②研究授業や公開授業において生徒指導の4機能を活かした授業の視点で評価しあえる。 ③授業でのICT活用の常時化(安全かつ効果的に生徒が自分の意志でタブレットを活用)と家庭学習との相互作用による授業展開 ④単元ごとの観点別評価規準について生徒が納得できるように示している。	授業改善に取り組み、全国学力調査において全国平均-2ポイント以内、高知県学力定着状況調査県平均-2ポイント以内	3年全国学力調査(4月) 全国平均 国:+3ポイント以上 数:+5ポイント以上 1,2年県学力調査(12月) 県平均(1年) (2年) 国:+5ポイント以上 +2ポイント以上 社:+5ポイント以上 +5ポイント以上 数:-3ポイント以内 +5ポイント以上 理:+0ポイント以上 +5ポイント以上 英:+5ポイント以上 +5ポイント以上 ・研究主任及びチーム会(知)が中心となり、目的意識を明確にした授業改善を進め、生徒に付けるべき力の育成に組織として取り組んだ結果、点数に直結したと言える。 ・帰リ学習で、5教科を中心とした現状課題に沿った取組を行い、教科担任が各学年にローテーションで学習支援したことも基礎基本の定着につながっている。	B	・生徒個々の状況に応じたICT活用が定着しており、主体的に学習に取り組む姿勢や、全国・県学力調査の結果向上という具体的な成果に結びついている。	・正答率だけでなく「なぜその答えになったか」という発想や思考過程の可視化と共有する時間を設け、学び合う場面設定を作る。 ・中1初期段階での学習の躓きを防ぐため、小学校の学習履歴(状況、支援方法)に基づいた継続的な取組や補習体制を構築する。 ・授業DXの指定事業に応募し、授業実践を重ねることで対話型AIによる学習の効果性を検証し、授業改善をより一層進める。		
		学校情報化優良校取得への取組を推進する。 【学校情報化優良校認定基準アンケート平均2以上】	【学校情報化優良校認定基準アンケート】 平均 中間1.62点→年度末2.65点 ・学校情報化優良校としての基盤ができて、教員間のスキルの底上げと教育DXの環境整備が並行して進んだ。 ・教科において、ICT活用の効果を検証しながら授業改善に取り組むとともに、生徒がICTを用いた自己調整学習肯定率は全教科の平均が88.6%と高く、自分の学習に合わせた活用が定着してきている。	A	・今後は、授業と家庭学習の連動性をさらに高め、自律的な学習習慣の確立を目指してほしい。具体的な指導や個別支援を充実させ、生徒が学習の達成感を実感できる仕組みを整えることで、自発的な学習時間の伸長を図ってほしい。		B	・ICTを「ツールとして使う」段階から「学習効果を高める」段階への移行期にあり、ICTを「評価」や「パフォーマンス課題」にどう組み込むかという質的転換について研究していく。 ・情報担当等を中心に校内研修で情報発信やスキル向上を通じて、授業や校務分掌での活用を向上させる。
		家庭学習時間 【1時間以上 70%以上】	【家庭学習時間1時間以上】 54.3% ・効率的に学習し結果を出す層がいる一方で、小学校段階からの学習習慣が欠如している層、支援が必要な層での学習時間の低さが浮き彫りになった。「一律に時間を増やす」指導の限界が見えている。	C				・週3ページと自主学習ノートの自由度を高めた成果は出ているが、何をすればよいか分からない層への「ガイドライン」や「アプローチの方法」、学校内で学習を完結・補完できる環境作りを引き続き継続して取り組み、次は自立した学習へと転換できる支援を行っていく必要がある。 ・授業と家庭学習のシームレス化(つなぎ目がない)を図り、生徒が授業、家庭学習で学んだことを生かしながら学びを深めていくことができる、実感ができる指導の工夫を行う。
徳	①暴力行為0 ②新規不登校を出さない ③「自分には良いところがある」否定群0% ④「道徳の勉強は好き」否定群0% ⑤「道徳の時間・・・良く考えている」否定的意見0%	暴力行為0 新規不登校0 いじめ継続の解消	暴力行為0、不登校(継続3名、新規0名) いじめ認知1(解消取組中) ・いじめ認知を1件に抑え、新規不登校を0とした背景には、校内支援会による「情報の共有」と「支援の迅速な軌道修正」がある。特に、家庭訪問等の地道な連携と学年団やSCからの多角的な視点から生徒を捉え、継続的な対応につながっている。	B	・不登校がこれ以上増えないように、不登校の未然防止に向け、小中連携における支援内容や手法の共有を一層強化し、継続的な支援体制を確立していったほしい。また、特別活動の充実を図ることで、生徒一人ひとりの居場所と役割を明確にし、集団の中での絆を深め、いじめや不登校抑止の組織的な取り組みに繋げてほしい。	・引き続き、暴力行為、新規不登校、いじめ0に向けた学校経営・学級づくりに取り組む。 ・教員による見守りだけでなく、生徒自身が「いじめを許さない空気」をどう作るかを学級会で議論し、行動につなげ、「学校は楽しい」という生徒アンケート肯定群90%以上を目指す。 ・次年度は、この修正された計画を運用し、さらに「生徒の資質・能力の変容」に焦点を当てた、より質の高い持続可能な形を目指し、特別活動と総合的な学習の時間の系統性から特別活動との関連性を持たせた年間計画を作成し、各学年で実践を積み上げる。 ・教員は、生徒全員に「居場所と出番」があるように、学級活動や行事等での役割、日常の些細な行動に対し、教員が意図的な声かけ(価値づけ)を徹底し、成功体験を積み重ねさせる。 ・生徒同士で認め合う「文化」を構築し、心理的安全性を高める学級づくりを行う中で、「自分は受け入れられている」と実感できたり、「自分は何もできていない(＝価値がない)」という強い不安を払拭し、「特別な成果」ではなく、行動の意図に価値があることを周囲が肯定できたりするような仕組みづくりを行う。 ・自分なりの正解が見つからないもどかしさや、価値観のぶつかり合いに、生徒が自分事として悩み続けられるよう、よりリアルティのある「葛藤場面の設定」と、多角的な視点を与える「対話の質の向上」に注力し、学年団でのローテーション授業と授業研究の継続により、教員のファシリテーションスキルを向上させる。		
		持続可能な特別活動を構築する	・各学年の年間計画に基づき、「計画通り実施できた事項」と「実施が困難だった事項」が記録として明確化され、「実践しながら修正し、来年度をより良くすること」へと教員の意識が変容と、「見直しを前提とした運用」自体が持続可能を高める結果となった。よって、今年度の取り組みにより、「記録→修正→次年度計画への反映」というPDCAサイクルの基盤が完成した。	B	・教育活動のあらゆる場面において、生徒が自身の成長を実感できる成功体験の創出に努め、自己肯定感(自尊感情)の向上を図ってほしい。			
		全ての教育活動において自己有用感に基づく自尊感情を高める 【「自分には良いところがある」否定的意見10%以下】 【「まわりの人の役に立っている」強肯定50%以上】 【地域貢献意識 否定的意見 25%以下】 【「地域社会をよりよくするために、何かできることはないか」を考える」否定的意見20%以下】	【生活アンケート】 「自分には良い・・・」 否定的意見25.8% 「まわりの人の役に・・・」 強肯定32.3% ・「自分には良いところがない」と答えた生徒と「周りの人の役に立っていない」と答えた生徒が一致している。肯定的回答者は学習場面での支援や係活動など、目に見える行動を通して実感を得ているが、目立った役割のない生徒は「実感がない」「関わりが少ない」と感じ、自己評価の低さや人間関係の希薄さが起因している。 「地域社会をよ・・・」 否定的意見16.1% ・肯定的回答者は、他者との協働や貢献活動・経験が自己有用感につながっている。否定的回答者は、役割の不明確さや成功体験の不足が影響している。また、生徒が「居場所と出番」を実感できる環境づくりが課題として残る。	C	・教員が日常の些細な善行や『当たり前』の行動を意識的に認め、称賛する活動を推進し、自分の行動が他者や集団の役に立っているという実感を育むことで、自己有用感(貢献感)の醸成につなげてほしい。			
「考え議論する道徳」の授業が行われている道徳 【「道徳の勉強は好き」否定的意見15%以下】 【「道徳の時間・・・よく考えている」否定的意見10%以下】	【道徳アンケート】 「道徳の勉強は好き」 否定的意見25.0% 「道徳の時間・・・」 否定的意見8.3% ・「道徳が好き」という肯定的回答が減少した。「よく考えている」という実感の増加から、自分自身の生き方や価値観と結び付けて、相対的・俯瞰的に考えようとする移行期にあると考える。	C						

中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価(R7)		改善策等
		達成状況	評価	考察	評価	
体	①朝食摂取率の向上 毎日食べている又は食べる日が多い90%以上	規則正しい睡眠や食事など基本的な生活習慣を向上させる。 (朝食摂取率、毎日食べている。食べる日が多い90%)	①【生活調査のアンケート結果】 朝食を「毎日食べている、食べる日が多い」 R6:92.4% → R7:92.0% ・1学期3年生で83.4%だったが、2学期末には90%と伸びた。全体的には食べている生徒がほとんどであるが、一部の生徒については食べないことが習慣になっている。	A		・生活調査を継続的に実施し、動向を見とるとともに、保健だよりで生徒及び保護者に対して、朝食の大切さや体づくりとの重要性について啓発していく。 ・家庭科の授業の中で、朝食の重要性や栄養バランスの学習を位置づけ、朝食づくりの実習を行うなど、朝食を食べることへの意識を向上させる。
	②総合評価で総合判定D層の割合減少 男子15%以下 女子15%以下	小中9年間の系統的な人権教育年間計画の作成	・夏期研修を経て、中学校におけるカリキュラムマネジメントを意識した人権教育年間計画を完成させ、参観日で家庭とともに意識啓発の場を設けることができた。 ・小中9年間の計画作成にまでは取り組むことができなかった。発達段階に応じた人権感覚をいかに生徒の内面に定着させるかが課題である。	B	・保健だよりの発行や外部講師による啓発活動が効果を上げ、就寝時間の目標達成という成果につながっている。メディア使用時間については依然として課題がある。今後は情報リテラシー教育をさらに深化させ、生徒自らがメディアとの付き合い方を律し、生活リズムを調整できる『自律的な管理能力』の育成を継続して進進してほしい。	・小中9年間の系統的な人権教育年間計画の作成を人権教育主任が中心になって取り組む。 ・人権学習を「道徳」や「特別活動」だけの時間に限定せず、教科授業や学校生活のあらゆる場面で価値づけし、人権感覚の向上を図り、気付きや行動化に繋げていく。
	③体育の授業は楽しくない 男女とも0%	生徒自身が生活習慣の見直しにつなげることができる 【メディア使用時間 各学年20%以下】 【就寝時間0時以降 3年30%以下、1・2年20%以下】	【生活調査アンケート(10月)】 メディア使用時間2時間以上の割合 (1年:26.7%、2年:21.3%、3年:27.1%) 就寝時間0時以降 (1年:0%、2年:6.6%、3年:23.3%) ・「睡眠時間は確保できているが、メディア時間は減らない」という結果から、生徒が限られた時間の中で、睡眠を削らずにメディアに触れている実態がある。	C	・課題種目の数値が向上し、継続的な取組が着実な成果として表れている。運動意欲の高まりが体力改善の原動力となったことを踏まえ、今後は特にD・E層の生徒に対し、他者との比較ではなく『過去の自己記録からの伸び』を重視した個別目標を設定し、一人ひとりが自身の成長を実感し、運動への自信を深められる指導を充実させていってほしい。	B ・家庭内でのルールの設定やメディアとの付き合い方を自分でコントロールする力を付けるための具体的な働きかけをするため、経年変化を追い、啓発活動を継続する。
		総合判定D層以下をC層にあげる。 (総合評価D層以下 男女とも10%以下)	【体力テスト(5月)】 総合評価D層以下の割合 (男子39%【9名】、女子10%【5名】) 【体力テストを1月実施】 1年男子(D層の生徒)の結果 (長座体前屈:37.4cm→38.2cm、握力:14.6kg→19.2kg、立ち幅跳び:156.2cm→164.2cm) 立ち幅跳び女子の結果 (1年:171.2cm→180.2cm、2年:175.0cm→175.3cm、3年:167.2cm→168cm) ・課題であった1年男子のD層の握力・長座体前屈・立ち幅跳び(女子も)の数値が向上した。目標達成のために設定した取組を継続した成果や、授業の中で運動に対する意欲を高めることができたことが結果に表れた。	B		・改善幅が小さかった「男子の柔軟性」や「女子の持久力」といった、特定の体力要素に対するアプローチを継続的な重点種目とし、授業評価アンケートで「体育の授業で自分の成長を実感した」肯定群の向上を目指す。
横断	①部会を中心としたボトムアップによる学校運営に参加する体制が整えられている。	3部会の取組等の連携を図るための会議を行い、学校の課題の解決に向けてチーム学校としての組織を向上させる。	・3部会から企画委員会や学年会、学年会や企画委員会から3部会へといった提案や協議という還流システムが構築され、組織的な意思決定の流れが定着した。 ・行事計画に位置付けていなかったため、研究推進委員会が開催できない月があった。	B	・校種間での協議が行われ、連携・交流の基盤があるため、次年度はこれをさらに深化させ、単なる交流に留まらない、発達段階を見通した『9年間の学びと育ち』の一貫性をより強固なものにしていってほしい。	・年度当初に「第〇水曜日は研究推進委員会」と年間行事予定に組み込むとともに、会議後の伝達を待つのではなく、決定事項を即座にクラウド上で全教職員が閲覧・コメントできる体制を構築する。
	②企画委員会を時間割に位置づけ、学校の課題や改善すべき状況を捉え、職員会議等で適切な提案・運営がされている。	生徒自身が危険を予測し、回避する能力を身に付けさせる訓練が実施できている。 被災後の生徒のいのちを守るための危機管理マニュアルを作成する。	・年3回の避難訓練において、状況設定を変えた多角的な訓練により、生徒の主体的な判断力が向上した。 ・火災訓練では、新たな避難方法を体験させることができた。また、引き渡し訓練の実施・振り返りを行い、訓練のマニュアルを作成することができた。 ・研修で得た「被災後の心のケア」等の視点をマニュアルへ反映させる作業が、まだ「見直し中」の段階にある。	B	・生徒の主体的な判断力の向上を高く評価し、今後はより複雑なシチュエーションを想定した訓練を継続して行ってほしい。また、小中の児童生徒が互いの安全を確認し合い、学びを共有(シェアリング)する学習活動を導入することで、『共にいのちを守り合う』意識を地域全体で育てていくことも大事である。	・「発生直後の回避」については高いレベルに到達しているが、「被災後の生活・心理支援」という中期的な視点の具体化が次なるステップである。 ・引き渡し訓練を園小中合同の場合を想定した訓練を次年度は実施し、課題を見出す。
	③地域・保護者との防災学習や避難訓練が実施でき、危機意識が高められている。保護者と生徒の間で休日や夜間の避難後に合流する場所を決めている。	園小中での教育内容を話し合い、カリキュラムに反映させ実践し、持続可能な取組を検証し、次年度の計画に反映させる。	・各チームのキャップを中心に、合同職員会で協議された取組をもとに、中学校段階における重点取組を決め、生徒の実態やアンケート調査をもとにPDCAサイクルを機能させ、継続性のある取組の実践を行うことができた。また、小中学校で生徒の学習支援の体制確認のための情報共有など、具体的な提案がなされた。合同研修会では、「震災後の心のケア」やこれからの連携の進む方向性について講師から示唆を頂き、連携の方向性を考えることができた。	B	・地域社会とのつながりを重視し、学校外での実践活動を積極的に取り組んでほしい。自分たちが地域のためにできることを考え、行動に移すプロセスを通じて、『自分が人の役に立っている』という自己有用感(貢献感)の醸成につながってほしい。	・今後の連携のあり方について新たな提案がなされ、計画の共有だけでなく、園と小、小と中の指導の連続性を肌感覚で理解し合えるような連携へと変化させていくことが必要である。
	④県指定事業「社会に開かれた生徒指導実践研究事業」での取組・実践により、継続的な取組となり、生徒の地域貢献への意識改革が進んでいる。	繁忙期以外では、時間外月45時間以内及びワークバランスとの健康保持する。	【時間外月45時間以上】 (月平均 中間30%→年度末27%) ・45時間以上の該当者が30%から27%へ微減。定時退校日の導入やTTの廃止(授業時数見直し)により、業務時間内に教材研究や分掌事務に充てる時間が確保され、仕事の効率化に直結している。 ・教員減による一人当たりの分掌負担増と、部活動(土日)の影響が依然として大きく、根本的な解決には至っていない。	B	・教職員の長時間労働抑制と健康維持は、教育の質を保つための最優先課題である。業務の効率化と優先順位の精査を徹底し、持続可能な学校運営体制を構築するとともに、教職員が心身ともに健康な状態で生徒に向き合える環境づくりに努めていってほしい。	・教職員からの業務改善提案を募る場の設定を設け、現場の困り感を救い上げ、小さな工夫を積み重ねていく。
⑤こども園小中連携で総合の時間、特別活動、人権教育で15年間の系統性のある連携した指導が推進されている。						
⑥メンタルヘルスを意識した分掌業務負担軽減とワークバランスとの健康保持がされている。						

評価基準 A:十分満足 (80%~) B:おおむね満足 (80%~60%)
C:もう少し努力すべ(60%~40%) D:大いに努力が必要 (~40%)

経営理念	<学校教育目標>	人間力の育成
	<生徒像>	(1)自主的に学ぶ力の育成 (2)豊かな感性と人間性を育てる心の教育 (3)自己実現の育成 (4)豊かな体の育成
	<学校像>	飛び立とう 香我美は夢への滑走路 ～ かがやけ がんばれ みりょくあれ ～

中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価		改善策等														
		達成状況	評価	考察	評価															
<p>確かな学力の定着</p> <p>1 授業評価指標(ルーブリック)で、「伝え合う力」の項目でステップ3の割合を全学年60%以上。□進んで質問60%□積極的60%</p> <p>2 高知県学力定着状況調査 1年全教科と2年(数・理・英)正答率目標値、2年正答率目標値(社+2 数+5)</p> <p>3 定期テストで、思考力・判断力・表現力を問う記述問題正答率50%以上。</p> <p>4 授業評価アンケート各項目で強肯定50%以上。①「授業では、課題の解決に向けて課題を把握し、自分で考え、自分から取組むことができましたか」(主体性)、②「友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付くことができましたか」(深い学び)、③「わからないことが分かるようになったり、新たな発見や気づきに向かって、自分の学び方を考える事ができましたか」(自己調整力)、④「授業の中で、将来役立つと思う、能力が身につきましたか」(考え方・学習の進め方等)」(学び方・資質能力)。</p>	<p>1 授業評価指標(ルーブリック)で、「伝え合う力」でステップ3の割合を全学年50%以上。□納得いくまで進んで質問50% □わかりやすく説明50%</p> <p>2 県学力定着状況調査:1年2年全教科正答率目標値達成</p> <p>3 定期テスト・単元テストで、思判表を問う記述問題正答率45%以上。</p> <p>4 授業評価アンケート各項目で強肯定40%以上。 ①「授業では、課題の解決に向けて課題を把握し、自ら考え、自ら取組」(主体性)、②「仲間との対話活動を通じて、自らの考えを深めたり、新たな考え方に気付く」(深い学び)、③「わからないことが分かる、新たな発見や気づきに向かって、自らの学び方を考える」(自己調整力)、④「授業の中で、将来役立つと思う、能力が身につく」(考え方・学習の進め方等)。</p>	<p>1 授業評価指標(ルーブリック)「伝え合う力」 □納得いくまで進んで質問 26.0% 【未達成】 □わかりやすく説明 26.6% 【未達成】</p> <p>2 県学力定着状況調査:正答率目標値達成 ・1年 国56.3(-6.7)、社54.8(-1.1)、数44.8(-12.2)、理44.5(-13.1)、英32.7(-19.2) 【全教科未達成】 ・2年 国65.6(-4.6)、社65.4(+12.8)、数54.6(+4.1)、理47.8(-2.7)、英44.2(-6.8) 【社・数 達成、国・理・英 未達成】</p> <p>3 定期・単元テストで、思判表を問う記述正答率 国55.3% 社51.2% 数40.3% 理32.2% 英34.1% 【国・社 達成、数・理・英 未達成】</p> <p>4 授業評価アンケート ①(主体性)65.7% 【達成】 ②(深い学び)61.3% 【達成】 ③(発信力)63.0% 【達成】 ④(学び方・資質能力)数値化が困難なため評価できなかった</p>	D	<p>○授業評価指数「伝え合う力」において26%で未達成ではあるが、中間検証の16%から比べると10%上昇しており、先生方の努力が見られる。</p> <p>○学力定着状況調査および、定期テスト、単元テストで、思判表を問う記述問題の目標数値においては未達成の教科が多いので、理解が不十分な生徒への対応に力を入れてほしい。</p> <p>○授業評価アンケートにおいては、④の項目は来年からは省き、①～③の設定数値を上げて、さらに上を目指してほしい。</p>	C	<p>○授業自体は生徒がゴールに向かって意欲的に取り組むことができる授業展開がなされている。授業の内容に着目すると思考の質は上がっているが、共有の仕方に課題が残る結果となっている。比較、多面的多角的に物事を考えることはできても、それを伝え合いさらに深い学びへとつなげることに課題が見られるため、授業展開の仕方を研究していく必要がある。</p> <p>○確実な知識の定着に向けて、一人一人が考え、またICTを活用した効果的な共有によって、思考が深まる授業展開を全教科で行っていく必要がある。</p> <p>○学校教育目標の達成に向けて身に付けさせたい資質・能力について全職員で確認し、そのための、重点目標の「学力」と「発信力」に対する具体的な手立て、その検証方法、チェック機能を確立し、継続の判断、改善策の提案ができる組織体制(チーム会)をさらに充実させていく。</p> <p>○学校生活での土台となる、安心安全な学級経営をめざし、生徒指導の三機能を生かした集団づくりに努める。</p> <p>○クラウドを活用した主体的な授業づくりに取り組んできた。その中で、『学習の手引き書』や『単元の流れ』などを生徒に提示してきた。これにより安心して生徒自ら学習形態を選択でき、主体的に学習を進めることができた。</p>														
							<p>豊かな心の育成</p> <p>1 <<いじめ・不登校>> ○魅力アンケート問2①～⑦の件数0 ○30日以上欠席数0人、不登校欠席数2%以下</p> <p>2 道徳調査 ②「道徳の授業では、自分の考えを伝えたり、…自分のことを考える」 ③「家の人と…『家庭で取り組む高知の道徳』を読んだりしている。」強肯定60%以上 ④「自分にはよいところがある」強肯定70%以上 ⑤「将来の夢や目標をもっている」 ⑥「人が困っているときは、進んで助けている」 ⑨「地域や社会をよくする…」を考慮することがある」</p> <p>3 教科の図書館活用、貸出数年2800冊以上。</p> <p>4 「魅力ある学校生活アンケート」では、「学校が楽しい」65%以上、「みんなで何かをするのは楽しい」80%以上</p>	<p>1.<<いじめ・不登校>> ○魅力アンケート問2①～⑦の件数0 ①嫌なこと(冷やかしからい)や悪口を言われた。 ②グループや集団から仲間はずれにされたり、無視された。 ③ものを隠されたり、汚されたりした。 ④ぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりした。 ⑤お金や物を取られたり、壊されたりした。 ⑥嫌なことや危ないこと、恥ずかしいことを無理やりさせられた。 ⑦恥ずかしいこと(はだかを見る、からだを触るなど)をされた。 ○長期欠席年間30日以上 8人以下</p> <p>2.道徳意識調査 ○道徳意識調査「自分にはよいところがある」強肯定50%以上(豊か) ②「道徳の授業では、自分の考えを伝えたり、…自分のことを考える」 ③「家の人と…『家庭で取り組む 高知の道徳』を読んだりしている。」 ④「自分にはよいところがある」 ⑤「将来の夢や目標をもっている」 ⑥「人が困っているときは、進んで助けている」 ⑨「地域や社会をよくする…」を考慮することがある 肯定群60%以上、強肯定55%以上</p> <p>3 教科の図書館活用、貸出数年1500冊以上。</p> <p>4.「魅力ある学校生活アンケート」では、「学校が楽しい」60%以上、「みんなで何かをするのは楽しい」75%以上</p>	<p>1.<<いじめ・不登校>> ○魅力アンケート問2①～⑦の件数 ① 5件 ② 2件 ④ 2件 ⑦ 2件 【未達成】 ③、⑤、⑥ 0件 【達成】</p> <p>○長期欠席年間30日以上 6人【8人以下達成】</p> <p>2.道徳意識調査 ○道徳意識調査「自分にはよいところがある」(豊か) ・強肯定 43% 【未達成】 ②「道徳の授業では、自分の考えを伝えたり、…自分のことを考える」 ・肯定群 90% 【達成】 ・強肯定 43% 【未達成】 ③「家の人と…『家庭で取り組む 高知の道徳』を読んだりしている。」 ・肯定群 30% 【未達成】 ・強肯定 14% 【未達成】 ④「自分にはよいところがある」 ・肯定群 80% 【達成】 ・強肯定 36% 【未達成】 ⑤「将来の夢や目標をもっている」 ・肯定群 78% 【達成】 ・強肯定 42% 【未達成】 ⑥「人が困っているときは、進んで助けている」 ・肯定群 95% 【達成】 ・強肯定 46% 【未達成】 ⑨「地域や社会をよくする…」を考慮することがある ・肯定群 75% 【達成】 ・強肯定 43% 【未達成】</p> <p>3 教科の図書館活用、貸出数 個人:628冊 学級:366冊 電子図書:862冊合計1856冊【達成】</p> <p>4.「魅力ある学校生活アンケート」 「学校が楽しい」強肯定58.8%【未達成】 「みんなで何かをするのは楽しい」61.1%【未達成】</p>	C	<p>○魅力アンケートの結果については③⑤⑥以外が未達成であるが、結果についてすぐ生徒に聞き取り対応していることは望ましいことである。</p> <p>○コミュニケーションの苦手な子が、不登校生徒のほとんどのため、一番心が壊れる②の「無視」を重点に取り組んでほしい。</p> <p>○引削田健介さんのような心に響く講演をする講師に来てもらうことはいいことである。今後も続けてほしい。</p> <p>○基本は家庭での問題でもある。家庭環境によっても大きく影響が出てくるので、「いいことだよ」、「助かる」など、ちょっとした肯定的な声掛けを家庭や地域で行っていく必要がある。</p> <p>○生徒主体の行事が増えていることはいいことであるが、目標値を越えられないのは、すべての生徒に浸透していないことがあるのではないだろうか。すべての生徒を巻き込む今後の取り組みに期待する。</p>	C	<p>○気持ちメーターの取り組みも定着し生徒の状態を細かく知れる手立となった。次年度も継続。また、魅力アンケート、二者面談と合わせ早期発見に効果的であった。二者面談では、不祥事防止の観点から、密室にならないように工夫をした。</p> <p>○本年度、長期休業前にSOSの出し方について関係機関と連携しての取組も今後継続し、内容の充実を図る。</p> <p>○人権や命に係わる、外部講師を招聘する機会を増やすことができ、生徒の心に響く講演会を持つことができたので今後も継続していく。</p> <p>○道徳だよりによる取組の周知が不十分であった。次年度は、定期的に発行できるようにする。また、「高知の道徳」を活用し、長期的に教育活動を通して家庭と連携して道徳の取組を推進していく必要がある。</p> <p>○生徒が安心して登校できるようにするために、安心安全な学級づくり、集団づくりを目指す。特別活動の時間での話し合いの取組を中心に、各教科での効果的なペア、グループ学習の取組も行っていく。</p> <p>○全教科による図書館活用については、冊数が目的にならないよう、「読み取る力」「書く力」をつける手立につながるための実践とする。また、電子図書等の利用も含め、教科等での活用率を高めることができたので、今後継続発展させていく。</p>							
														<p>地域を活用した教育の実践</p> <p>1 学校評価 ①「家庭や地域、関係機関と協力して子どもたちを見守る体制」肯定90%</p> <p>②「地震津波対策、不審者対策や防災対策など安全対策をしっかりと行っている。」10人</p> <p>2 地域との連携・協働 ①総合的な学習の時間アンケート(県版学調生徒質問含む) ・「人の役に立ちたい」強肯定群90%以上。 ・「社会や地域の課題を解決したい」強肯定群90%以上。 ②県版学調生徒質問(道徳意識調査)「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」強肯定90%以上</p>	<p>1 学校評価 ①「学校は、学校や子ども達の課題を明らかにし、生徒・保護者・地域の協力を得て解決しようとしていると思いますか。」肯定群80%</p> <p>②「地震津波対策、不審者対策や防災対策など安全対策」回答人数昨年比10%減</p> <p>2 地域との連携・協働 ①総合的な学習の時間アンケート(県版学調生徒質問含む) ・「人の役に立ちたい」強肯定80%以上。 ・「社会や地域の課題を解決したい」強肯定80%以上。 ②県版学調生徒質問(道徳意識調査)「地域や社会をよくするために何をすべきかを考える」強肯定60%以上。</p>	<p>1 学校評価 ①「学校は、学校や子ども達の課題を明らかにし、生徒・保護者・地域の協力を得て解決しようとしていると思いますか。」肯定群 93.2% 【達成】</p> <p>②「地震津波対策、不審者対策や防災対策など安全対策」回答人数 昨年比 0.27%減 【未達成】</p> <p>2 地域との連携・協働 ①②総合的な学習の時間アンケート(県版学調生徒質問含む) ・「人の役に立ちたい」強肯定 93.1% 【達成】 ・「社会や地域の課題を解決したい(地域や社会をよくするために何をすべきかを考える)」強肯定 83.8% 【達成】</p>	B	<p>○地震津波対策、不審者対策や防災対策など安全対策への取組みはできているが、主体的に日々の生活の中で、考え行動できるような実践をしていってほしい。</p>	B	<p>○防災学習においては、専門家を招聘しての防災講演会、防災対策課と連携したHUG訓練および避難所開設訓練、避難所設営訓練により、身近なことから提案される学習ができた。また、生徒会の生徒自らが企画運営し、防災対策課とタイアップした防災フェスタを実施できた。今後も、さらに関係機関と連携し実用できる体験学習や講演会を計画的に行う。</p> <p>○香我美中学校の創立50周年行事への協力を生徒が計画して実行できた。また、地域貢献のための取組に、地域の方との交流を取り入れることで、地域のことを考え、人や地域の役に立ちたい、自分にも人の役に立つ活動ができると考える体験的な取組み等も引き続き実践する。</p> <p>○地域防災に関する学習を取り入れながら、自己を大切にし、さらには他者と協働的に何かを成し遂げたりする経験をさらに多く取り入れていきたい。自己肯定感を高めながら、他者との協働による成功体験を仕組んでいく必要がある。</p> <p>○学校からの発信については、学校だより等のお便り及び、「すぐる」による配信、ホームページによる配信等を定期的に行っていく。</p>

経営理念	【学校経営理念】 香南市基本理念の下、本校教職員は教職員間の人間関係を大切にしながら価値観を共有し、組織を効果的に機能させることで生徒の学力を保証する。 「個人で考えること」「他者と学び合うこと」をもとに、『わくわくさせる授業づくり』を追求するなかで、生徒に自覚と責任を持たせ、他者との協働に価値を見出し、多種多様なこの時代の変化を乗り越え、未来を創造する生徒の育成をめざす。
	【学校経営方針】 ＜めざす学校＞ ① 人権教育を基盤とした学校 ② 保小中高の連携と地域との連携を中心軸に据え、協働して子どもを育成する学校 ③ 地域や社会に期待され、信頼される学校 ＜めざす生徒＞ ① 自他の尊厳と正義を重んじ、心身ともに健康な生徒 ② 学びの真理を希求し、なかまとともに学び、高めあう生徒 ③ 自主性を持ち、自らの進むべき道を探求し、地域、社会、日本の未来を切り開く力を持った生徒 ＜めざす教職員＞ ① 教育に信念を持ち、学校運営と教育活動に組織として取り組む教職員 ② 生徒や保護者の立場に立ち、次代の人材を育成する志を持つ教職員 ③ 「和」を大切にす教職員

	中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価		改善策等
			達成状況	評価	考察	評価	
豊かな心の育成	多様な体験活動を通して、人とのかかわりを深め、豊かな人間性を育む。	学級活動や生徒会活動を通して、自己有用感の育成や人間関係づくりを推進する。学級便りや学校便り、部活動・学級会活動を通して、生徒を肯定的に評価する。	生徒会執行部は自ら考え、発信する組織となりつつあり、今後も主体的に取り組んでいくと考える。一方で「生徒会・委員会活動は活発に行われている」の生徒の肯定的評価は87%であるが、委員会活動が話し合いにとどまることも多くの場面で見られ、生徒主体の活動とはなっていない。	C	「生徒会活動の活性化・放課後学習、学校間の連携は、学校をより良い方向に変えていく手立てとして評価できる」の肯定的評価は100%である。今年度も学校運営協議会は生徒総会や執行部によるプレゼンテーションを参観し、アドバイスを行った。また高校入試に向けての面接練習でもアドバイスを行った。	B	生徒が主体となる活動を生徒自ら企画・立案し、生徒一人一人に活動の場を与えることで、成功体験と達成感を持たせる。また、周り(地域・小学生)からの感謝や賞賛、各便りを活用した「いいね写真」や肯定的な評価により自己肯定感・自己有用感を継続して育んでいく。
	生徒一人ひとりに出番を与え、成功体験・満足感・認められ感を持たせ自己有用感を育成する。	人との関わりを豊かにするための体験的な学習(修学旅行・職場体験学習)等やボランティア活動(校内清掃・海岸清掃・古民家清掃)等、これまで以上の学校行事の充実を推進する。	城山高校生徒会との連携による学校近辺の清掃活動、また高専生との古民家清掃を実施した。校内では、卒業式会場を飾るバンジーの植え付け作業に多数の生徒が参加した。それらの活動によって認められ感、自己有用感を持たせるには、もっと意図的に仕組む必要がある。	C	城山高校生徒会との連携による学校近辺の清掃活動、冬の夏祭り前の「古民家清掃」など、地域の公立中学校として地域に貢献できていることは評価できる。	B	どろめ祭り、古民家清掃、冬の夏祭り等、地域とともに取り組んだ活動、ボランティアが評価されたと思われる。城山高校との清掃活動も再開し、次年度はさらに清掃活動の範囲を広げたいと考えている。1学期に生徒総会の様子を見ていただいたことも高い評価につながっていると思われる。
	読書活動の推進(図書館教育の推進を図り、言語環境の整備を進める)	「朝の読書」の更なる充実を図る。図書資料を活用した授業実践を行う。生徒が利用しやすい、図書館の環境整備を行う。小学校への紙芝居の読み聞かせを実施する。	図書委員会は多読賞の表彰を行うなど、読書活動の推進に意欲的に取り組んでいる。校区内2小学校への読み聞かせは、1学期に実施することができた。教科や領域と連携した図書の選定と活用や、「朝の読書」に特化したコーナーの設置など図書館運営の工夫によって、今後更に言語環境を豊かにしていく。	B	PTAから各学年に学級文庫を贈呈することで、今後も本に親しむ図書館運営の一助を担い、充実がより期待される。	B	図書館支援員による新刊図書の紹介や、PTA学級文庫の選書のおかげで学校図書は充実している。来年度も、図書委員会の自主的な活躍に期待し、読書活動をより推進していく。また図書館と、教科・領域との連携も進めていく。
	道徳教育を推進し、「聴く」「語る」ことのできるコミュニケーション力の育成を図る。	道徳教育推進教師を中心とした「考え議論する道徳」を充実させる。年間3回以上、講師を招聘しての全校研修を実施する。	年間3回の研修を実施し、うち1回は香南市道徳教育推進協議会の公開授業としておこなった。事前に各学年による教材研究などもあり、充実した研修となった。自分の考えを持ち、話し合うことにより相手の考えも知って多様な価値観に触れることで、豊かな心が醸成されるものとする。	B	学校に力を入れてほしいことに「社会のルールや決まり、道徳教育・人権教育」が上位となっていることから、道徳性や人権意識の高まりは地域の願いである。	B	香南市道徳教育推進協議会の公開授業を行い事後協議を通して改善点を確認するなど「考え議論する道徳」への研究をすすめている。来年度も引き続き高知大学森有希先生との校内研修を年3回設定し、指導力の向上や内容の充実を図っていく。
学力の定着と向上	国語、社会、数学、理科、英語の基礎学力を伸ばし、生徒の学ぶ力を高める。	県のベシックガイドブックに即して授業実践を進め、基礎学力の向上と定着を図る。	授業において生徒は「分かった」「表現活動が楽しかった」と感じているが、各種調査や定期テストの結果からは学力が十分定着しているとは言えない。基礎学力の定着、思考力・判断力・表現力の向上のためには、授業改善や単元テスト等の実施によりスモールステップで学力向上を図ることが必要である。	C	◆学校に力を入れてほしい項目に「分かりやすい授業」が上位にあげられており、授業改善の取組、研修等による研鑽により、教員の資質・指導力の向上をより期待している。	B	各教科等における見方・考え方を働かせ「主体的・対話的で深い学び」となるように「振り返り」や「問い返し」をうまく活用する。また、研究主任を中心に授業スタンダード(先生に頼らず自分たちで学ぶ方法)の実践を進めていくために、計画的に校内研修を行う。
	家庭学習の習慣化に努める。	終学活時学習(小テスト)と家庭学習(宿題)のスパイラルを継続し家庭学習の定着を図る。	生徒の家庭学習時間は、「30分以下」10.5%(4名)、「全くしない」15.8%(6名)との結果であることから、学校においては計画的な学習の手立てを行い、家庭においては学習に向かう環境をつくるなど、子どもたちを学習に向かわせるために学校と家庭の協力は不可欠である。	D	「赤中が実施している生徒会活動の活性化・赤中タイムの実施・保小中高の連携等は、評価できるものだ」は100%で、本校が実施している赤中タイム(基礎基本の学習・B問題)の取組を評価している。	B	家庭学習の習慣化のため、授業と家庭学習の連続性のある取組を模索しているところである。主体的な授業参加と家庭学習の習慣化により、基礎学力の定着を目指す。
	言語活動の充実を推進する。(コミュニケーション力の育成・向上)	「聴くこと」「語ること」「思いを伝えあうこと」のスキルの向上を目指した言語活動の実践を行う。	自分の思いを、相手に伝えるようにするための十分な語彙を身に付ける必要がある。また相手の思いにも耳を傾け、思いを伝え合うためのソーシャル・スキル・トレーニングが必要である。	C	自己解決や集団解決の学習が目指す授業になるように期待している。	B	「聞くこと」「伝え、表現すること」を授業等で評価を加えながら、考えを伝え合うことへとつながっていく取り組みをする。そのためには、各教科ともに共通項目を意識した授業展開を追求することが重要である。開かれた人間関係づくり、受け入れてくれる関係をより構築していく。
信頼される学校	保護者や地域に開かれた学校づくりに努め、信頼される学校を確立する。	学校便りや学級便り、生徒会便り、保健だより等を紙媒体やすぐるを活用し、保護者や地域に対して、積極的に情報発信をする。	「学校からの情報発信に満足している」の問いに対し保護者の肯定的評価は75%である。すぐるによる情報発信は適宜行っているが、QRコードを活用した保護者向けのアンケートの回収が12家庭であったことから、すぐるの活用により一部苦手の保護者がいるとも考えられる。	C	「学校からの情報発信に満足している」の肯定的評価は83%である。学校行事のHPへの掲載も検討し、地域の方にも広く活動を知っていただき、声をかけていただくことが子ども達の認められ感につながっていくのではないだろうか。	C	学校便りや学級便り、生徒会便り、保健だより等、学校の様子を積極的に情報発信する。またHPを活用して保護者・地域へも多くの情報を提供していきたい。
		保護者や地域住民の参加を得られるような参観日等の学校行事の工夫をする。	「学校行事は充実している」に対する保護者評価は75%となっている。生徒は92%の肯定的評価を示している。保護者へは5重奏楽団の演奏会や、情報モラルについての講演などへの参加を呼びかけたが、参加人数は多くはなかった。家庭や地域とのつながりが持てるような企画や、参加へのPRが必要である。	B	学校運営協議会委員は、生徒総会をはじめ3年生の入試対策として面接練習、給食の試食にも参加もしていた。	B	学校は保護者・地域と協力して課題を解決できるよう、積極的な情報発信に努める。また保護者が参加しやすい参観日の設定、内容の企画等、学校行事の工夫を進めていく。
	安心・安全な居心地の良い学級づくりを推進する。	定期的な「いじめ」アンケート等の実施および活用により、生徒にとって安全・安心な学校づくりをする。	「充実した学校生活を送っている」の生徒の肯定的評価は79%であるが、生徒は学校に力を入れて欲しいこととして「いじめ・暴力の根絶」を挙げている。「学習や生活についての相談に丁寧に応じてくれる」と答えた生徒は84%であり、「いじめ」アンケート等を活用し、普段から子どもたちの様子の変化を教員間で共有し、気軽に相談できる雰囲気や態勢を整えたい。	C	学校運営協議会、保護者とも「社会のルールや決まりを守る指導」が上位にあるのは、昨今の社会の状況や本校の現状からのご意見だと捉えると、真摯に受け止めて指導に努めなければならない。	B	学校生活においては、先生と生徒の良好な関係づくりをはじめ、何でも相談できる存在となるために、生徒の目線に立ち寄り添った教育活動の実践を大切にす。
	全校統一した授業規律の確認と授業実践を行う。	「生徒指導の三機能」を生かした授業・学級づくりを目指す。学級経営について教職員が統一した内容の取り組みを実践する。	担任を中心とした学級活動をはじめ、全教科の授業づくりにおける「生徒指導の三機能」をより意識した授業展開を通して学級づくりを進める必要がある。	C	学校運営協議会、保護者とも学校が力を入れることとして「分かりやすい授業」が上位に挙げられている。学力向上が子どもたちの希望の進路実現につながっていくことを強く期待されている。	C	学校経営理念の「本校教職員は教職員間の人間関係を大切にしながら価値観を共有し、組織を効果的に機能させることで生徒の学力を保証する。」や「個人で考えること」「他者と学び合うこと」をもとに、わくわくさせる授業づくりを追求するなかで、生徒に自覚と責任を持たせ、他者との協働に価値を見出し、多種多様なこの時代の変化を乗り越え、未来を創造する生徒の育成をめざす。」を再確認する。

【評価規準】 A：十分満足 B：おおむね満足 C：もう少し努力すべき D：大いに努力が必要

経営理念	<p>生徒会スローガン 誇れる野市中をみんなの力で！ Lebel Up More</p> <p>学校教育目標 しなやかな心を持ち、志高く自ら学び行動することができる生徒の育成</p> <p>学校経営理念 「地域とともにある学校」「全ての子どもたちが安心して豊かに生活し、学びのある学校」の実現に向け、チーム学校として一人一人の教員が質の高い教育を追究しようと主体的に参画している学校を目指す。</p> <p>研究主題 #ActioNする15才～自分から動き出そう～</p> <p>目指す生徒像 「仲間と協力する」「自ら行動する」「課題を探究する」「地域に誇りを持つ」</p>
------	---

中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価		改善策等
		達成状況	評価	考察	評価	
豊かな心 仲間や他者とつながり、自分自身の将来を考えたることができる生徒を育成する	①保健指導の充実による基本的な生活習慣の確立 ・学校評価アンケート「早寝、早起き、朝ごはん等の基本的な生活習慣が身につけている」肯定群85%以上	質問項目「早寝、早起き、朝ごはん等の基本的な生活習慣が身につけている」の肯定群は、生徒82.9%【82.5】、保護者69.1%【69.8】で昨年度とほぼ同じであり、目標には達していない。保健指導や掲示物を通してより良い生活リズムの確立に向けて発信を行ってきた。今後は再度、保健委員会を通して生徒が主体となる取組や保護者への情報発信を行っていく必要がある。	B	肯定群は生徒82.9%、保護者69.1%で前年度とほぼ同水準だが、目標の85%には届かずB判定となった。保健指導や掲示物を通して啓発により意識の維持は図られているが、就寝時刻の遅れなど家庭生活に踏み込んだ改善には至っていない。生徒の健康意識と家庭の認識の間に依然として温度差があることが課題である。	B	保健委員会を核とした生徒主体の啓発活動を強化し、自分たちの生活リズムを自ら見直す機会を創出する。また、学校保健委員会等の場を活用し、睡眠や朝食が学習・体力に与える影響について具体的なデータを保護者へ発信することで、家庭との連携をより深める。SNSの利用ルール作りも含め、地域全体で生活習慣を支える。
	②発達支持的生徒指導の実施による、自尊感情、規範意識の醸成 ・学校評価アンケート「自分には良いところがあると思う」「学校の規則を守ることができる」肯定群85%以上	質問項目「自分には良いところがあると思う」「学校の規則を守ることができる」の肯定群は、生徒79.7%【84.8】で目標には達していない。「学校の規則を守ることができる」の肯定群は、生徒95.4%【96.5%】、保護者91.0%【89.2%】で85%以上は達成している。また、教職員質問事項「個々の子ども頑張りを認め、ほめている」の肯定群は96.3%であることから、今後も引き続き生徒指導の4つの視点を生かした授業づくり、学級経営に取り組んでいく必要がある。	B	「規則を守る」は目標を達成したが、「自分には良いところがある」は79.7%で目標の85%に届かなかった。教員の「生徒をほめる」肯定率は96.3%と極めて高いが、それが生徒自身の自己肯定感に十分に還元されていない。生徒指導の4つの視点を基に、関わりは定着しているが、内面的な自信の醸成には時間を要している。	B	成功体験を実感させる場面を意図的に設定し、個々の頑張りを多角的に評価する体制を継続する。教員による称賛だけでなく、行事や日常の活動を通して生徒同士が認め合う機会を増やす。自己肯定感の向上を重点目標に掲げ、自己理解を深めるワークショップや教育相談を充実させ、一人ひとりを大切に教育を推進する。
	③不登校の未然防止、不登校生徒への自立支援の手立ての充実 ・学校評価アンケート「学校の先生たちはよく話を聞いてくれる」肯定群80%以上	質問項目「学校や先生は、あなたたちの意見や希望を聞いてくれますか」の肯定群は、生徒92.2%【92.5】、保護者87.3%【84.3】で保護者は昨年度より4p上がっている。2学期末不登校傾向生徒(20日以上欠席)は、18人【18人】と同等である。本年度もSC、SSWにない限り、個別の支援会を行い、医療機関や森田村塾、保護者と連携しながら対応してきた。今後も未然防止、初期対応、自立支援の手立てを組織的に進めていく。	A	先生が「話を聞いてくれる」との生徒肯定群は92.2%と高く、保護者の評価も上昇しておりA判定となった。不登校傾向の生徒数は横ばいだが、別室登校や教育相談を通じた組織的な対応が機能している。スクールカウンセラーやSSWとの連携により、生徒が安心して過ごせる居場所づくりが一定の成果を上げてきている。	A	登校という結果のみを求めるとはならず、社会的自立を見据えた個別の支援計画をさらに充実させる。初期段階での迅速な情報共有と組織的対応を徹底し、未然防止のためのアセスメントを強化する。また、関係機関や適応指導教室との連携を一層密にし、多様な学びの場を確保することで、生徒の不安解消に努めていく。
	④学級活動や生徒会活動の充実による、生徒の自治力の育成 ・学校評価アンケート「生活や学習に関わるルールを自分たちで決定している」「小さいトラブルは自分たちで解決できる」肯定群80%以上	質問項目「あなたのクラスは、生活や学習に関わるルールを自分たちで決定していますか」の肯定群は、生徒91.0%【91.3】、「あなたのクラスは、問題が起こった時に、みんなで話し合って解決することができますか」の肯定群は、生徒87.5%【90.0】といずれも85%を超えている。引き続き、学級活動の中で、学級の課題解決に向けて話し合い活動を行い、自分たちの学級を自分たちで改善していく活動を充実させるとともに、生徒会活動を通じて生徒の自治力を育成する必要がある。	B	学級のルール決定や問題解決への参画意識は85%を超えており、目標を達成した。生徒会スローガンのもと、自分たちで学校を良くしようとする姿勢が見られ、学級単位の自治活動は順調に進んでいる。若年教員の指導体制も機能しており、生徒の主体的・対話的活動を支える教員の支援スキルも向上している。	A	学級単位の活動で培った自治力を、生徒会活動を通じて学校の運営や地域貢献へと広げていく段階にある。生徒の意見を学校運営に反映させる場を工夫し、自分たちの行動で学校が変わる実感を持たせる。また、ICTを活用した意見集約など、現代的な手法を取り入れた合意形成のプロセスを経験させ、多様な市民性を育てる。
	⑤キャリア教育の充実による、将来の夢や希望をもった生徒の育成 ・学校評価アンケート「目標や夢をもって学校生活を送っている」肯定的群80%以上	質問項目「目標や夢をもって学校生活を送っている」の肯定群は、生徒83.1%【84.0】、保護者71.1%【68.8】で目標には達していない。進路学習や職場体験学習、保育実習等の活動を実施するなかで、将来に対する見通しや希望を持たせることにつながるよう学びをつなげてきた。今後は効果的にキャリアパスポート等を活用し、夢や希望を持った生徒の育成につなげていきたい。	B	生徒の肯定群は83.1%で目標を達成したが、保護者は71.1%に留まり全体としてB判定。職場体験や進路学習を通じて将来への見通しを持つ生徒は増えてきたが、その学びの内容が家庭へ十分に伝わっていない可能性がある。夢や目標を持つことの重要性は理解されているものの、具体的な進路選択に結びつける力が求められる。	B	キャリアパスポートを効果的に活用し、3年間の学びの軌跡を可視化することで、自身の成長を自覚させる取組を強化する。保護者に対しては夢や希望の意図や活動内容を積極的に発信し、家庭での進路対話を促す。また、外部講師による講演や地域人材との交流を継続し、社会の多様な在り方に触れる機会を充実させる。
	⑥人権教育、道徳教育の推進による人権意識、道徳意識の向上 ・学校評価アンケート「友だちの良いところや頑張り、一人ひとりの違いを認め合っている」「どのような行動が適切かを考えて行動ができる」肯定群80%以上	質問項目「友だちの良いところや頑張り、一人ひとりの違いを認め合っている」の肯定群は、生徒91.4%【93.8】だが、「あなたは、まわりの人(家族、友達、先生)から認められていると思いますか」の肯定群は85.3%【87.5】と差がある。また「あなたは、学校生活でどのような行動が適切かを考えて行動することができますか」の肯定群は、生徒96.1%【94.3】で1.8p増加している。学級・学年で人権発表を行ったほか、全校でも発表した。また、親子講演会では外国人(異文化)や生徒会活動でジェンダーについて考える場を設定するなど、生徒が身近な人権問題を「自分事」として捉えられるよう工夫した。	A	「人から認められている」と感じる生徒が85.3%に達し、他者を尊重する意識も81.4%と高くA判定。道徳科を中心に「ジェンダー平等や異文化理解」「自分事」として捉えられた実践が進んだ。生徒による集約活動での呼びかけや啓発ポスターの取組も定着しており、多様性を認め合う学校風土が醸成されつつあることが数値に表れている。	A	道徳科を核とした授業改善をさらに推進し、多面的・多角的な視点から議論を深める場を設ける。SNS上での人権啓蒙など、現代的な課題に対しては生徒自ら考え、判断できる力を育成する。一人ひとりの存在が尊重される安心・安全な集団づくりを継続し、差別や偏見を許さない感性と実践力を組織的に育てていく。
	⑦いじめの予防、早期発見、いじめへの組織的に迅速な対応 ・学校評価アンケート「いじめは絶対に許さない」という強い意志を持っている」肯定的群100%	質問項目「いじめは絶対に許さない」という強い意志を持っている」の肯定群は、生徒96.6%【96.3】、強肯定79.7%である。各学級で話し合い、いじめない宣言を全校で発表するなど自分たちで取り組んでいく雰囲気も醸成されている。学期ごとの2者面談やアンケート調査から早期発見、早期対応につなげている。また、毎週実施するいじめ防止対策委員会の中で生徒の状況を共有するとともに、対応や対策協議し全体へ周知している。今後も学校いじめ防止基本方針に乗りこみ、いじめの早期発見や日常の生徒理解に努め、適切な情報共有や対応に努めていく。	B	「いじめは絶対に許さない」という強い意志を持つ生徒が96.6%と極めて高く、強肯定も約80%を維持。いじめない宣言や週1回のいじめ対策委員会による情報共有が定着し、早期発見・早期対応の体制が確立されている。些細なトラブルも組織で共有し、迅速に対応する姿勢が、生徒や保護者の安心感に繋がっている。	B	本年度改定した学校いじめ防止基本方針を全職員で再確認し、日常的な観察と丁寧な見取りを継続する。いじめアンケートの実施だけでなく、タブレットを活用した日常的な相談体制の構築も検討する。また、いじめの傍観者になるための学級づくりを推進し、生徒同士の絆を深めることで、集団による自律作用を高める取組に注力する。

中期経営目標	短期経営目標(評価項目)	自己評価		学校関係者評価		改善策等
		達成状況	評価	考察	評価	
確かな学力 目標を見据え、自ら進んで何事も最後までやり抜くことができる。志高く自ら学び、行動することができる生徒を育成する	①授業改善と学力補完の取組の充実による、生徒の学力向上 ・各種学力調査の平均正答率が県レベルに達する	全国学力・学習状況調査、高知県学力定着状況調査の結果を見ると、おおむね目標の果しレベルに達している。授業改善の取組は大きく進んだが、学力補完の取組についてはまだまだ課題が残っている。学力補完の取組を見直し、授業改善と学力補完の両輪で生徒の学力向上につなげていく必要があると考える。	B	学力向上の取組は大いに評価できる。全国・県学力学習状況調査の結果は概ね目標水準にあるが、教科ごとの学力差が見られるためB判定。ICTを活用した授業改善は進み、生徒の学習意欲は高まっているものの、基礎的・基本的な知識の定着を確認する手立てが不十分な場面がある。学力向上に向けたPDCAサイクルの確実な実行が引き続き求められる。	B	授業改善のためのPDCAサイクルを中期のスパンで計画的に回していき、年度当初にいつ、何を検証するのか系統的な年間計画を立てて授業改善に取り組んでいく。生徒が自律的に学ぶことができる授業づくりは教科横断的な視点で取り組むことで、学力向上につなげていきたい。
	②1人1台端末をクラウド活用し、生徒が自律的に学ぶ授業づくりの実践 ・教員アンケート「授業におけるタブレットの活用について、実践している」が100%	教員アンケートの「授業におけるタブレットの活用について、実践している」と回答した先生の割合は96.8%とほとんどの教員がクラウド活用の授業づくりに取り組んでいる。教師の指示で一斉に行う授業スタイルから1人1台端末をクラウド活用して生徒が自律的に学ぶ授業スタイルへと授業改善が大きく進んでいる。今後はさらに生徒が自律的に学ぶ授業スタイルへの授業改善を進めていきたい。	B	教員のICT活用率は96.8%と非常に高く、クラウド活用による自律的な授業スタイルへの転換が大きく進んだ。生徒がタブレットを文房具として使いこなさず、情報の収集・整理・共有をスムーズに行う姿が見られる。授業観がより伝わりやすくなり先生方も大変だと思っており、生徒が自律的に学ぶ授業スタイルの授業づくりがこれからは進んでほしい。	A	今後は活用「量」から「質」を高める段階へ移行する。生成AIの適切な利用ルール作成や、教科横断的なプロジェクト学習でのICT活用を模索する。今後も1人1台端末をクラウド活用して生徒が自律的に学ぶ授業スタイルへの授業改善に向けて教科横断的に取り組んでいく。教科主任会で教科横断的な重点取組の検証、改善を行い、教科会で教科としての重点取組の検証、改善を行っていく。
	③重点的に育成したい資質・能力である自律力、プレゼン力の育成 ・授業評価アンケート「課題の解決に向けて、自分から進んで取り組んでいる」「資料や文章、話の組み立て、自分の意見を述べることができている」肯定群50%以上	指標である、授業評価アンケート「課題の解決に向けて、自分から進んで取り組んでいる」「資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している」では、それぞれ肯定率が99.9%、85.3%と目標を達成している。自律力は育成できていると実感しているが、プレゼン力については十分育成できていないと感じている。本年度は学習発表会で有志によるプレゼン大会を開催した。生徒のプレゼンへの意識は向上しているため、授業や授業外で生徒がプレゼンする機会を設定し、プレゼン力の育成を目指していきたい。	B	自律力に関しては89.5%で目標を達成している。プレゼン力の肯定率は85.3%に留まっているが、学習発表会等で自分の考えを表現する機会が豊富に増えていることは評価できる。論理的に構成し、他者に分かりやすく伝えるスキルについては個人差が大きい。授業の中で自信を持って発表できるまでの指導プロセスの充実が継続して必要である。	A	各教科や総合的な学習の時間のなかで、設定構成や話し方の基本を指導する機会を意図的に創出する。少人数グループでの発表から始め、段階的に全校の前で表現する場を作る。また、相互評価を取り入れ、他者の良い表現を学ぶ活動も推進する。デジタルツールを効果的に使った表現力の育成に組織的に取り組む。
	④1人1台端末を活用した家庭学習の充実 ・生徒アンケート「平日の家庭学習時間1時間以上」「80パーセント以上」肯定群80%	生徒アンケート「平日の学習時間1時間以上」「デジタルドリルは、自分の力を伸ばすことに役立つ」の肯定的評価が、それぞれ64.3%、73.8%と目標には達しなかった。定期的デジタルドリルを活用した家庭学習を取り入れているが、それが生徒の家庭学習の充実につながらなかったと感じている。来年度は授業の予習、復習につながる家庭学習の方法を再検討し、家庭学習の充実につなげていきたい。	C	学習時間やデジタルドリルの活用に関する肯定率が64%・73%に留まり、C判定となった。タブレットの持ち帰りは実施しているが、宿題のデジタル化や家庭での自学自習への活用が定着していない。生徒の学習意欲を喚起する家庭学習の内容や、授業とつながる家庭学習となる内容の設定が課題となっている。	C	家庭学習を「やらされるもの」から「自ら取り組むもの」へ変えるため、予習・復習の具体的な方法を示した手引きを改訂し明示する。AIドリル等の活用状況を細かく把握し、称賞や励ましの声をかけることで意欲を支える。保護者に対し、家庭での学習環境整備の重要性を周知し、学校と家庭が連携して学習習慣を確立させる。
	⑤複数教員による教科指導や少人数学習の効果的な活用や、個に応じた支援の充実 ・学校評価アンケート「授業がよくわかる」肯定群85%以上	授業理解に関わる質問項目の肯定群は、生徒78.5%【85.1】、保護者53.5%【45.7】、教員92.6%【65.5】であった。生徒、保護者、教員で、大きな差がある。教員の正確な見取りや加配教員・学習支援員による個に応じた支援を充実させる必要がある。	B	加配教員や学習支援員が加配が必要な生徒に個別に声をかけたり、デジタルドリルなどのツールの活用により、個に応じた支援は向上してきている。また、保護者への説明や、保護者の自己評価も向上している。きめ細かな指導体制の再構築が必要。	B	TTや少人数学習を継続するとともに、授業の中で個別に適切な学びの機会を意図的に創出することで、個々の興味関心に応じた学びを提供する必要がある。また、デジタルドリルや生成AIアプリアを活用することで、子に応じた支援を充実させていく。

信頼される学校 保護者や地域に開かれた学校づくりに努め、信頼される学校を確立する	①野市中学校から不祥事を出さない ・不祥事防止委員会を立ち上げる。 ・月1回以上、不祥事防止の教員研修を行う。	不祥事防止委員会を立ち上げ月1回実施した。絶対に本校から不祥事を出さないことを合言葉に、年間を通して不祥事防止の研修を計画的に実施することにより、一人一人のコンプライアンス意識が醸成された。不祥事を生じさせない組織風土の構築を図った。研修では服務規律や個人情報の管理の徹底について、不祥事防止及びハラスメントについて自分事となるよう取り組んだ。	B	月1回の不祥事防止委員会を開催し、コンプライアンス意識の醸成を徹底した。服務規律や個人情報管理について、事例を自分事として捉えらる研修を積み重ねた結果、組織として不祥事を起こさせない組織風土を構築しているところが評価できる。また、風土のよい職場づくりが進み、高い意識の下で、不祥事を許さない関係性が構築されていることも評価できる。	B	不祥事防止委員会の定期的な開催は継続し、研修内容を自分事とするよう検討していく。また担当者輪番にするなど機動的な視点から不祥事防止の意識を醸成していく。また意見や批判が自由に報告できる雰囲気となるよう管理職を中心に継続して風通しのよい職場づくりに努めていく。
	②地域学校協働本部の活動の活性化 ・放課後学習支援、環境整備の取組を行う。 ・防災に関して、地域と協働した取組を行う。	放課後学習支援は、12月末現在15名(1年5名、2年6名、3年4名)の参加者で計画通り実施している。支援員の先生方が丁寧に指導してくれている。12月に学校周辺環境整備を人権擁護委員と連携して実施することができた。防災学習に関しては、計画的に避難訓練を実施し、複合災害を想定するなど命を守る行動への意識は高まっているもの、地域と連携した取組は出ていない。	B	放課後学習支援や環境整備は計画通り進んでいるが、防災教育に関しては避難訓練の準備に留まり、地域との協働した実践までは進んでいない。地域と地域が一体となって課題解決に取り組む場面が少なく、さらなる連携の強化が地域共助の意識向上には不可欠である。	B	学校運営協議会等の場を活用し、地域住民と生徒が共に学ぶ防災訓練やボランティア活動を具体化する。学習支援員の確保についても、地域住民へ積極的に働きかけ、多世代交流の場として放課後学習を充実させる。地域と共にある学校として、生徒が地域に貢献し、地域や地域人材を巻き込みながら実施できる取組を企画する。
	③保護者や地域へ学校の情報の積極的な発信 ・学校評価アンケート「学校は、家庭への連絡・情報提供を積極的に行っている」と肯定的群80%	「学校は保護者や地域へ情報提供を積極的に行っている」という質問項目の肯定群は保護者86.1%【84.3】、教員100%【92.9】となり、目標値は達成した。「すぐる」を活用して学校通信を電子化したり、学級担任が積極的に学級通信を発行するなど、生徒の様子を伝えようとしている。	B	学級通信や学校通信を定期的に発行し、学校の取組を積極的に発信している。今後も情報発信を適宜行い、保護者や地域との信頼関係を深めて欲しい。	B	「すぐる」を活用した保護者との情報共有や情報提供を促進し、学校と家庭の連携を強化していく。同時に、学校ホームページ等を通じて地域社会にも情報発信を行い、地域とのつながりを深めていく。
	④学校評価の実施 ・学校評価アンケート「学校は、子ども達、保護者、地域の意見を聞いてその声を活かしている」と肯定的群80%	質問項目「学校は、子ども達、保護者、地域の意見を聞いてその声を活かしている」の肯定群は、保護者86.7%【77.9】、教員96.3%【82.1】で昨年度に比べて高くなった。学校行事後に保護者にアンケートを実施し、得られた意見を次年度にいかしていく。	B	アンケート結果の肯定的な回答が増加傾向にあることから、学校運営の改善が着実に進んでいると評価できる。	B	生徒、保護者、地域からのフィードバックを学校運営に活かすため、学校評価アンケートの項目を見直し、回答内容に基づいた取組の改善を図り、双方向のコミュニケーションとなるよう今後も促進する。
	⑤交通指導、安全教育の充実による、安心・安全な学校づくり ・学校安全計画の周知、見直しを行う。 ・計画的に交通安全教室、避難訓練を行う。	学校安全計画を踏まえ、教職員と共有を図りながら、危機管理に努めてきた。学校危機管理マニュアルも担当者を中心に災害後の教育活動の継続や心のケアについて見直し、自転車の乗り方については、地域の方から注意を受けるなど課題となっていた。避難訓練や救急教育講習については予定通り行い、2年生では避難所運営ゲームAUGを体験するなど学習を進めている。	B	危機管理マニュアルの整備や訓練は適切に行われているが、自転車の乗車マナーについて地域からの指摘があり、交通安全意識の定着に課題があるためB判定。施設点検等は計画的に実施されているが、登下校時の安全確保を含め、生徒一人ひとりの「自分の命を守る」という自覚をさらに促す必要がある。	B	生徒会執行部や地域・保護者と連携した登下校指導を強化し、軌道上の安全委員による呼びかけも推進する。防災学習では「自助・共助」の精神を養う取組を継続し、予測困難な事態にも自ら判断し行動できる危機管理能力を組織的に育てる。

評価基準 A:十分満足 (80%以上) B:おおむね満足 (80%~60%) C:もう少し努力すべき (60%~40%) D:大いに努力が必要 (40%以下)